

てのし、これを切って、ふかしたり、揚げたり、焼いたりして食べますが、コメの餅のように粘り、よくのびます。色は黒っぽいのですが、さつまいもの香りがして甘く、おいしいものです。

古き良きものが見直される時代ですが、このような素朴なさつまいもの郷土料理は、都

会から島を訪れる人たちに喜ばれています。これから先も、島の魅力の一つとして、さつまいもと、それを用いた郷土料理が長く生き続けるよう願っていますし、私どもは皆さんが二度三度と訪れたくなるような、明るく健康な島づくりに一層力をつくしたいと思っています。

ジャガイモと映画

『地下水道』、『スターリングラード』

ポテトエッセイスト 浅間 和夫

『地下水道』は昭和32年（1957）のポーランドの映画でした。原名は『Kanal』。ジャガイモをたくさん食べる国のこと、それが出てくる映画があって当然でしょう。第二次大戦下のワルシャワ、と言ってもその街の地下が舞台。ソ連軍の進攻に希望を託し、武装蜂起した対独レジスタンスがドイツ軍により壊滅的な打撃を受け、地下水道に追い込まれます。全編ほぼ迷路のような地下水道の汚水の中を這いずり回るレジスタンスの無惨な姿を正視したもの。途中、「カルトツフェル（ジャガイモ）、カルトーフエル」と連呼して芋を民衆に配るシーンが出てきます。

ポーランドを代表するこのアンジェイ・ワイダ監督はレジスタンスに参加した経験をもつので、描写はリアル。この映画でカ

ノヌ映画祭審査員特別賞を受け、ポーランド映画が世界から注目を集められる端緒になりました。多分廃盤になっているはずなので、私こと“変なジャガきち”にとっては残念なことです。

その第二次世界大戦で、ドイツとソ連の戦いとなるとジャン・ジャク・アノー監督の『スターリングラード』もあります。

1942年秋頃の市街戦でソ連側の、羊飼いの父におおかみ相手の射撃を仕込まれていたヴァシリと、ドイツの狙撃の名手ケーニッヒとの対決が普通の人には見ものなのですが、私にはヴァシリが後ほどケーニッヒのスパイにされる少年のいる、レジスタンス家族との最初の出会いで、ジャガイモが出てくることに関心がありました。